

本居宣長の研究態度

——『古事記伝』開板に至る過程を通して——

川 田 康 幸

序

古代の文学・文化・思想等を考える時、本居宣長は避けて通る事のできない巨人、超然と聳え立つ偉大な人物である。宣長は現代にも力強く脈脈と生きているのである。この宣長の畢生の仕事が『古事記伝』であり、宣長の学者としての全て、研究の方法論、目的、思想信条が書き込まれている。

本論では、まず宣長以前の記・紀研究の概略を記し、上京後の宣長の研究方法の確立が、どの様な影響の下におこなわれたかを見る。次に帰郷の後の、宣長の研究対象の確立と、その目標としたものを論じる。

京都遊学以前から、歌を通し、家庭環境を通じて漠然とした古典に対する興味を有していた宣長。その彼が歌論書を通して契沖と出合う。帰郷後、生涯の師となる真淵との出会い。『古事記』研究の過程における土清との交流。『古事記伝』開板に至る長い道のりを追うことで、その一端にふれてみたい。

一、宣長以前の記・紀研究

『古事記』の研究史の中で不朽の名著といえは質・量とも他を庄するものは、本居宣長の『古事記伝』を措いて外にない。このことは現在でも変わらない。今日では『日本書紀』を知らなくても、『古事記』を知らない人はいない位、『古事記』は市広く一般に知られ、その真価を認められている。今日のように『古事記』に重い価値を認める状況は、そう古いものではない。『古事記』と『日本書紀』の二書と比較すると、近世に至るまでは『日本書紀』の方が圧倒的に重要視されていた。そのことは、注釈書や写本の類が、中世まではほとんど『日本書紀』に限られていたという点で明らかであろう。今日とはまったく逆の立場であった。近世に至って両書の立場が逆転するのである。

『古事記』の成立は和銅五年（七二二）で、養老四年（七二〇）成立の『日本書紀』より八年早い撰録である。『古事記』は上・中・下三巻。一方『日本書紀』は三十巻。巻数だけの単純な比較ではあるが、『日本書紀』の方が『古事記』より圧倒的に分量が多いのである。また『日本書紀』の方は、

一品舍人親王奉^レ勅。修^レ日本紀。至^レ是功成^テ奏上。紀卅卷系圖一卷。

（『續日本紀』養老四年五月廿一日の条）

と、その完成の様が官撰国史の中に、しっかりと記録されている。だが『古事記』の方は、『続日本紀』の中にこの様な記録がない。『万葉集』の詞書・左注にわずかに引用されているだけである。^{註一}『万葉集』の左注の中には、『紀』あるいは『日本紀』と記された、『日本書紀』が数多く引用されている。即ち、このことは『古事記』は推古天皇までの記事で巻を閉じるのに対して『日本書紀』は持統天皇で巻を閉じる。そして、『万葉集』は推古天皇の次に即位した舒明天皇以降の歌が圧倒的におおいかからではないだろうか。

『日本書紀』は六国史の最初に編纂されたものとして、よく読まれていたと考えられる。即ち、『日本書紀』撰進の翌年の養老五年（七二二）から康保二年（九六五）の約二百五十年間に、少なくとも七回に亘る講筵が行なわれている。^{註二}一方『古事記』には宮中において講筵等がなされたという記録は発見されていない。『日本書紀』は鎌倉時代になって

からは当時勃興してきた神道論と結び、主として神代巻を中心とした注釈が盛んに行なわれるようになった。その一つが鎌倉時代中期頃に成立したとされる、卜部懷賢(兼方)の著した『釈日本紀』である。これは『日本書紀』講筵の「私記」や、卜部に伝えられてきた説等を集大成して纏めたものである。室町時代に入ると、忌部正通の『神代口訣』あるいは一条兼良の『日本書紀纂疏』という、いづれも神代巻の注釈書が記されている。この他一条兼良の影響を受けたとされる吉田兼俱が『日本書紀神代抄』を、また兼俱の子、清原宣賢が『日本紀神代抄』その他等を記している。

江戸時代に入っても『日本書紀』の神代巻は神道と結びつき、人々の好むところとなった。例えば新井白石は儒教でつちかわれた合理的精神で『日本書紀』の神代巻を中心にして、神代史を研究し、『古史通』・『古史通或問』を著している。荷田春満は神代巻の口述筆記である『日本書紀筋記』を纏めている。その後十八世紀に至り、谷川士清はこれ等江戸時代初期の諸家の説や典籍をあげ、『日本書紀通證』三十五巻を完成させた。これは『日本書紀』全般に亘る注釈で、宝暦十二年(一七六二)に開板されている。次に著されたのが河村秀根の『書記集解』全二十巻である。これは神・儒・仏の解釈を離れ、純粹に典拠をあげて注釈した学術的態度がとられており、『日本書紀』全巻におよぶ。

以上、本居宣長が『古事記傳』開板に取りかかった頃までの状況をごく簡略に示したものである。註三

『日本書紀』は撰録をみた養老年間より、国史として尊重され、中世以降特にその神代巻が神道論の典拠として「神典」視されてきた。その結果、写本も非常に古いものが残っている。例えば最古の写本とされる巻十のみの田中本は、奈良時代末から平安時代初期の書写とされている。その他平安時代中期の書写とされる岩崎本、平安時代後期の岩崎本院政期の宮内庁書陵部本、北野本等がある。これ等は完本ではなく、ところどころ残っている。また版本も慶長四年(一五九九)の勅版本の神代巻、慶長十五年(一六一〇)には本活字で三十巻全巻が刊行された。

以上みてきた如く、『日本書紀』の注釈・研究は、早くから精力的に行われていた。では『古事記』の方はどうか。

二、宣長以前の『古事記』研究

先述した様に『古事記』は『日本書紀』の如く宮中で講読された様子は見当たらない。官撰国史の『続日本紀』も当然の如く、『古事記』の推古天皇を受けて、舒明天皇から筆を執ってはいない。『続日本紀』は『日本書紀』を承けて、文武天皇から起筆している。『古事記』の研究・注釈は、近世に至るまで殆んど無いに等しい。『日本古典文学大辞典』によれば、平安時代には『古事記』は事物起源や神事縁起に対する欲求から読まれていた形跡がうかがえるという。鎌倉時代に至って、卜部兼文の著した『古事記上巻抄』が文永七年（一二七〇）に成立した。この本は、大國主神の国譲りの段について、『先代旧事本紀』の該当箇所を抄出して比較したものである。また同じ兼文ではないかとされる『古事記裏書』がある。この『古事記裏書』は、『真福寺本古事記』や『道果本古事記』という、伊勢本系統の古写本と非常に関係が古い。

卜部兼文は『釈日本紀』を纏めた卜部兼方の父であり、父子二代にわたり、神道家の立場から『古事記』『日本書紀』の神々の巻、上巻・神代巻を中心とした注釈を行っている。これ以降、江戸時代にいたるまで『古事記』の注釈や研究は見られない。ただしこの間に注目されることは、この研究の低調な間に、『古事記』の写本がいくつか残った点である。『古事記』の最古の写本は『真福寺古事記』である。これは名古屋市の真福寺宝生院に残されたもので、真福寺の二世信楡の命により、賢楡が応安四年（一三七二）に上・中巻を、翌五年に下巻を書写したものである。この真福寺の開基は能信上人といい、真言宗の教を学んだ人物で、伊勢神道の学統にある。二世の信楡の『類聚神祇本源』の奥書を書いている人物であり、その弟子の賢楡も伊勢神道の造詣もあったと考えられる。^{註四} ついで古いのが吉田家に伝わった上巻のみの『道果本古事記』である。永徳元年（一三八一）に道果の写すところとなった。伊勢本系統の本である。次い

で古いのが応永三十一年（一四二四）に道祥が写した『道祥本古事記』あるいは『伊勢本古事記』といわれる、上巻のみの写本がある。また応永三十三年に春瑜が『道祥本古事記』を写した、『春瑜本古事記』あるいは『伊勢一本古事記』と呼ばれるものがある。

『真福寺本』と『道果本』以下『春瑜本』に至るこの四本は多くの共通異文をもっている。『真福寺本』の奥書によれば、その中巻は、『釈日本紀』の編纂にかかわった卜部兼文、兼方父子と関係の深いことがわかる。

この外古いものとしては、卜部兼永の筆になる大永二年（一五二二）に書写された『兼永筆本』がある。これは卜部系統本の祖本にあたる。『古事記』の写本の多くは、ほとんどこの『兼永筆本』を祖本としており、現存するものは三十六本にのぼる。この卜部系統本は、祖本の『兼永筆本』以外は、江戸時代初期を溯ることはなく、近世に至るまでは、『古事記』の研究はまったく低調であったといえるのではないか。^{註五}

この様な状況を打破する一つの契機を与えるのが、『古事記』の版本の刊行である。徳川家康の文教政策により、多くの本が刊行されるようになった。先述した如く『日本書紀』は慶長十五年（一六〇〇）に全三十巻の刊行をみた。『万葉集』も江戸時代初期に、活字無訓本、その後、それに訓をつけた活字附訓本、そして、寛永二十年（一六四三）に活字附訓本の整版本が刊行されている。『古事記』の方も『日本書紀』や『万葉集』に比べると遅れるが、寛永二十一年（一六四四）に、いわゆる『寛永版本』が刊行された。その後、貞亨四年（一六八七）に渡会延佳の手になる、頭に校異・略注を記し、本文に句読点等をつけた、『齧頭古事記』が刊行された。渡会延佳は伊勢神宮の外宮の禰宜で、伊勢神道中興の祖とされる。ここにおいて始めて『古事記』研究に必要な基礎研究、本文校訂が、出版という形で出現したのである。

次に位置するのが契沖の『厚顔抄』である。これは元禄四年（一六九二）に成ったもので、全三巻である。そのうち

上・中二巻が『日本書紀』の歌謠の注釈で、下巻が『古事記』歌謠のうち『日本書紀』とだぶらないもの五十六首の注釈からなっている。これは中世以来の伝統である『日本書紀』を先にするという態度ではあるが、従来注の無かった『古事記』の歌謠について、実証にもとづく注釈をしたもので、当時としては画期的であった。契沖がここで用いた、多くの例証の中から結論にもってゆく帰納法的な、文献学的な研究方法は、今までの記・紀研究にはなかったもので、本居宣長の『古事記伝』などに多大の影響を与えたものである。

次いで現われたのは荷田春満の『古事記劄記』である。これは春満の講説したものを、甥の荷田信章が筆録したもので、享保十四年（一七二九）に完成している。春満は中世以来の伝統である、『日本書紀』の神代巻の注釈に大変な努力をしている。『古事記劄記』は『古事記』全巻にわたり、重要と思われる語を抽出し、それに注釈を加えたものである。春満は『日本書紀』神代巻を重視した点は、従来の神道家の伝統から脱け切ってはいないように思えるが、『古事記』の研究を志した点は注目されるべきである。春満以降に輩出する国学の系譜に属する『古事記』研究の隆盛を誘導した点では大きな意義がある。

この他、この頃には春日大社若宮の神主、中臣祐字の口述を、中臣祐用が記した『古事記聞書』（元禄十三年（一七〇〇））、延亨四年（一七四七）から宝暦元年（一七五一）頃までに完成したと思われる、河村秀興、秀根兄弟の記した『古事記開題』がある。

近世に入って、ようやく『古事記』の研究も、その緒についたわけである。『古事記』の方が『日本書紀』より高い価値がある古典であるとした、加茂真淵はどうであろうか。真淵の『古事記』に関する研究は、宝暦七年（一七五七）に完成した『古事記頭書』がある。これは、『鼈頭古事記』を底本として、本文および訓を校訂し、その上欄に頭注を記したものである。主題となっているのは『古事記』の訓である。真淵にはこの他『仮字書古事記』『古事記和歌略註』

がある。真淵は『古事記』の研究には、古語を知る必要性を痛感し、その古語を知る為に『万葉集』の解明を志した。そしてその為に真淵の全精力は『万葉集』の研究にむけられ、『冠辞考』や『万葉集考』などの大部の著書がある。また自宅では寛延元年（一七四八）閏十月から、『古事記』の会読を始め、晩年に至るまで継続している。真淵の『古事記』研究は『古事記』を訓むことに終ってしまつたかもしれないが、正しく読めて始めてその内容の理解ができるのである。真淵がまず『古事記』の訓読を志した点は、非常に大きな価値を見い出せるのではないか。

本居宣長も『古事記伝』の研究に際し、真淵の訓を借覧している。『古事記伝』の中にも、その影響が大なるものがあり、真淵の訓や語釈が八百六十余も採用されている^{註六}のである。

三、京師遊学と契沖・方法論の開眼

佐々木信綱はその著『松坂の一夜』の中で、宣長は「かねて、自分は『古事記』の注釈を志していた」とされているが、それはいつ頃から志していたのであろうか。また宣長が『古事記』という書物に興味を持ったのはいつの頃であるうか。この件に関して宣長は、『玉勝間』の「おのが物まなびの有しやう」の中で、

さて又道の學びは、まづはじめより、神書といふすぢの物、ふるき近き、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、わきて心ざし有しかど、とりたててわざとまなぶ事はなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばむと、こゝろざしはず、みぬるを、かの契沖が歌ぶみの説にならずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものの説^うおもむきは、みないたくたがへりと、はやくさとりぬれば、

（本文は『本居宣長全集』巻一
・筑摩書房・昭和四十二年）

と、上京以前から神道に関係する古典を、時代を問わず幅広く読んでいたと記す。このことは、母方の村田全次とその父村田元次の影響を抜きにしては考えられない。村田全次は若い頃、山崎闇齋の弟子・浅見綱齋に入門して、垂加神道

を学んでいる。宣長はこの親子に神道学の指導を受けていると、本居清造氏は『本居宣長稿本全集』の中で語っている。また今井田家へ養子に入ったことも、宣長の精神形成に大きな力となっている。^{註七}しかし本格的に古道学に目覚めるのは、京にのぼって、契沖の説に接してからである。そのことは

さて京に在しほどに、百人一首の改観抄を、人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説をしり、そのよにすぐれたるほどをもしりて、此人のあらはしたる物、餘材抄勢語臆斷などをはじめ、其外もつきく、^(「玉勝間」「おのが物」まなびの有しやう)もとめ出て見けるほどに、

と記している如く、『百人一首改観抄』に接してからである。宣長は契沖のこの書に接してからは、むさぼるように契沖の他の著書を購入している。目から鱗が落ちるような気がしたのであろう。また

右伊勢物語、契沖之説、而景山先生所増益也。蓋記臆斷者、皆契師之解矣。其餘入存彼師説乎、未詳焉。然不_レ出_二於右兩人説_一也

壬申^{二年}五月十二日

本居榮貞寫

右枕詞抄一册契沖所釋也。其爲説多是佳焉。故書寫之也。抄中以朱圈點者、蓋樋口氏所考加也。嗚呼恨_レ未_レ見_二代匠記全篇_一矣。

寶曆二年壬申霜月二十一日夜書于燈下。

神風伊勢意須比飯高 華風子

本居榮貞 ^(「本居宣長稿本全集」による)

宣長は、宝曆二年(一七五二)三月七日に入京し、十六日に堀景山に入門し、二カ月もしないうちに、契沖の学問に接したものである。契沖の学問に接した喜びが生き生きと写されている。

堀景山という人物は儒学者ではあるが、医術に通じ、徂徠や室鳩巢と親交があり、古文辞学に傾倒する一方、国文学

にも通じ特に契沖の学問を尊重した。宣長はこの堀景山に入門し、当然景山の警咳に接し、古文辞学の方法論、あるいは契沖の学問に親しく接したと思われる。宣長は景山を通して契沖を知り、その著作に接することで益々強く古道学を指向するようになったのである。そして宣長は契沖の「歌ぶみの説にならずらへて、皇國のいにしへ」を考えるようになったのである。古文獻を研究するにあたり、帰納的な文献学とでもいうべき方法論に到達したのである。最初は契沖の説く斬新な、たぶん説得的な諸説に驚きと喜びを感じたのであろう。しかし契沖のものを見たり聞いたりするうちに、宣長は契沖から学びとるものは、その個々の説・意見ではなく、まさに契沖のといった方法論であると気付いたのである。

『玉勝間』の中で宣長は契沖の説に対してかなり批判的である。例えば「かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける」(おのが物まなびの有しやう)と言ったり、「契沖法師があらためたるにて、又こよなくよくなれり、然れども誤字なるをしらずして、本のまゝによめるなどには、強^じたることおほく、そのほかすべてのよみざまも、なほよからざること多き」(萬葉集をよむころばへ)と個々の説には批判を加えている。ただし契沖の研究方法については、常に変わらず高く評価している。

(一) 近代難波ノ契沖師此道ノ學問ニ通シ、スベテ古事ヲ引證シ、中古以來ノ妄説ヲヤブリ、數百年來ノ非ヲ正シ、萬葉ヨリハシメ多クノ註解ヲナシテ、衆人ノ惑ヒヲトケリ、ソノ著述多ケレトモ、梓行セサレハ世ニ知^ル人マレナリ、オシイカナ、マヽ此人ノ説ヲミルモノハ、始テカノ異説トモノ非ナル事ヲサトレリ、サレハ近比ハスコフル傳受ナト云事ヲヤフル人モマヽ出來レリ、大カタ契沖ハ中興ノ歌學者トミエタリ、世ニ碌々タル輩トハ各別トオモハル、也。

(二) 唯有契沖學。不^レ溺^二時流^一、直據^二古書^一以考^二蔽^一之、大關^二邪說^一而倡^二古學^一。卓見哉。

(三) (カ) 古學の輩の、古學とは、すべて後世の説にかゝはらず、何事も、古書によりて、その本を考へ、上代の事

(明和二年八月、谷川士清宛)
寄簡。本居宣長稿本全集

〔排謫小論〕本居
宣長全集卷一

を、つまびらかに明らむる學問也、此學問、ちかき世に生まれり、契沖はふし、歌書に限りてはあれど、此道すぢを聞きそめたり、比人をぞ、此まなびのはじめの祖オキともいひつべき、

(『宇比山路』本)
(『宣長全集』卷一)

(一) (三)と時代をおって配列した(傍点筆者)。これは本居宣長の、契沖の研究方法来に言及しているものである。『排薦小船』は宝曆六年(一七五六)頃、京都遊学中に完成している。谷川士清にあてた書簡は明和二年(一七六五)、『古事記伝』の執筆に取りかかっていた頃である。『宇比山路』は寛政十年(一七九八)十月八日起稿、二十一日脱稿、宣長晩年の書である。寛政十年六月十三日『古事記伝』四十四卷の浄書完了、九月十三日『古事記伝』の完成祝賀会、と宣長の畢世の仕事とした『古事記伝』が全て完成した年である。完成祝賀会も終了し、最も充足した精神状態のもとに『宇比山路』は執筆されたと言える。

宣長は契沖の方法論について、(一)では「スベテ古事ヲ引證シ」して中古以来の妄説を正し、自分を含めた人々の惑ひを救つたと、その喜びを記す。(二)の士清宛の書簡は、まさに『古事記伝』の執筆にとりかかって一年前後という頃である。色々と構想に迷いが生じたり、行き詰まったことがあったのではないか。「時流ニ溺レズ、直ニ古書ニ據ル」と言っているのは、研究に行き詰まった時には契沖の方法論が宣長を叱咤激励したと言えるのではないか。(三)の『宇比山路』では古学の祖を契沖であると宣言し、その方法論は「何事も、古書によ」と記す。人生の充実期に記している。

宣長の契沖に対する態度で一貫しているのは、以上見た如くその方法論を評価している点である。歌学の方法論で感動した、古典に準拠した帰納的な、文献学的な方法論を京都遊学中に発見し、終生その態度を失わなかったのである。京都遊学の中頃までは畢世の仕事が何になるかはまだ決まっていなかったようである。ただ漠然とした古代に対する興味だけは有していたのであろう。先に掲げた宝曆二年の記録などからすれば、古代の歌集『万葉集』に対する興味も、宣長の古代研究、『古事記』の研究へと、研究対象を決めてゆく一里塚となっているのではないか。ただし京都遊学中

はまだ研究対象をしつかりと決めていたようではない。

宣長の『寶曆二年以後購求臚寫書籍』によれば、宝曆四年九月二十八日には『日本紀』を十三匁で購入し、宝曆六年七月には『旧事記』と『古事記』を十匁二分で、また同年十月には『万葉集』を卅五匁を購入している。また、宝曆六年七月二十六日には堀景山より、景山所蔵の『日本書紀』をゆずり受けているという^{註八}。以上は宣長のいう所の「道の学問」・「古学」あるいは「天照大御神の道」と「宇比山踏」で示すところの学問に、読むべきものとして掲げている書物である。

この他宣長は歌学に関するもの、あるいは物語等と、幅広く購入しているので、一概に古学を旨指したともいえない。ただし古学に対する志向は強かったと考えられる。

四、帰郷と真淵・研究対象の確定

この研究対象を模索していた宣長の目前にあらわれたのが、賀茂真淵である。

宣長三十あまりなりしほど、縣居大人のをしへをうけ給はりそめしころより、古事記の注釋を物せむのころさし有て、そのことうしにもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われももとより、神の御典をとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづからころを清くはなれて、古のまことの意をたづねえづはあるべからず、然るにそのいにしへのころをえむことは、古言を得たるうへならではあたはず、古言をえむことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ、さる故に、吾はまづもはら萬葉をあきらめんとする程に、すでに年老て、のこりのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることをえざるを、いましは年さかりにて、行きき長ければ、今よりおこたることなく、いそしみ學びなば、其心ざしとぐることに有べし、

(「玉勝間」よがたる
のうしの御さし言)

と記しているのを見ると、真淵に師事し始めた頃より『古事記』の注釈を志していた。宣長が直接真淵に出会うのは、宝暦十三年（一七六三）・宣長三十四歳の時の、五月二十五日のことである。その時の事を宣長は日記に、

廿五日曇天。○嶺松院會也。○岡部衛士當所新上屋一宿。始對面。

〔本居宣長稿本
全集〕第一輯

と、手短に簡潔に記している。宣長はその年のうちに、村田伝蔵の仲介をもって縣門の門人となることを許可された。そのことは、宝暦十三年十二月二十八日の日記に、

廿八日朝曇雨天。○去五月江戸岡部衛士賀茂縣主真淵當所一宿之節始對面。其後狀通入門。今日有許諾之返事。

〔本居宣長稿本
全集〕第一輯

と、書状をもって入門を願ひ、許可されたと記す。これはその労をとってくれた村田伝蔵からの手紙で知るのである。

先達而は御狀被_レ下候處、其砌方少々取込候義有_レ之、貴報も不_レ申上、背_二本意_一候。然者、其節被_二仰聞_一候岡部氏御入門之儀、申入候處、彌門弟に可_レ被_レ致旨被_レ申候間、佐様思召可_レ被_レ下候。束脩之義は、此方に而取斗、遣候様被_二仰遣_一、委細承知仕候。就_レ夫先生之入門之誓約遣申候御事に御座候。依_レ之寫縣御目_一申候。御認御下可_レ被_レ成候。將又、岡部氏より之書狀壹封御届申候。御落手可_レ被_レ下候。束脩入用書付、追而爲_レ差登_二可_レ申候。先は右之段得_二貴意_一度、早々如_レ是御座候。猶期_二後音_一之時候。恐惶謹言。

十二月十六日

村田傳蔵

本居春菴様

〔本居宣長稿本
全集〕第一輯

そして翌宝暦十四年（一七六四）正月に真淵に入門の誓紙を出している。また真淵の方もこの本居宣長のことを印象深く感じていたのであろう。

當所に本居舜庵と申醫師と尾張屋太右衛門と申者掛_二御目_一度と申入候而、右兩人來り候。舜庵は學才も有者に而、

其後半年ばかり過候而門弟入いたし、於今文通仕候。

と、後年に至って手記に留める程、印象深かったと言えよう。

宣長が真淵を知ったのは、その著『冠辞考』を見せてもらったからである。『玉勝間』に、

国にかへりたりしころ、江戸よりのぼれりし人の、近きころ出たりとて、冠辞考といふ物を見せたるにぞ、縣居大
人の御名をも、初めてしりける、
(「おのが物な
びの存しやう」)

と、宝曆七年に江戸から来た人物に近刊の書物だと言つて見せてもらっている。よ程現物が欲しかったのであろう、宝
曆十二年二月に三十六匁五分で購入している。註九

宣長が帰郷して医者を開業したのが、宝曆七年の十月六日である。自宅で『源氏物語』を開講したのが翌年の六月か
らである。宣長はこの頃のことを、『家のむかし物語』の中で「もはら皇朝のまなびに心をいれて、よるひるといはず
いそみつとめ」ていたと記す。そして『玉勝間』の中で述べている如く「冠辞考を得て、かへすくよみあぢはふほ
どに、いよく心ざしふかく」なつていった。そして『万葉集』の講座を開くのが、宝曆十一年(一七六一)五月二十
四日である。『冠辞考』を読んでまる三年以上を経過している。この『源氏物語』と『万葉集』の開講は相当の強い決
意のもとで行なわれたらしく、共に寛政七年(一七九五)、宣長六十六歳に至るまで、四回目と三回目の途中まで継続
して行なわれている。『万葉集』の講義は安永三年(一七七四)から四年の十月までは『古今集』の講義を入れて、第
二回目の講演は少し時間をおいているが、この他はずっと定日に行なっている。この決意の固かったことは、『万葉集』
開講の日の日記によく記されている。それは

廿四日萬葉集開講。先是枕草子講之。雖未終之申廢而講萬葉以三四之日爲定日。

(「本居宣長稿本」
全集第一輯本)

と記す如く、『枕草子』の講義を中断廃止して『万葉集』に切り換えているのである。宣長がこのように講演したものを途中で廃止したというのは、これ以外にはなく、並み並みならぬ宣長の決意をうかがわせるものであろう。『古事記』の注釈へむかつての準備を始めたとも考えられる。

宝暦十一年という年は、くり返しになるが初めて『冠辞考』に接してから四年目、『古事記伝』にとりかかるまであと三年、丁度中間点ともいふべき頃である。

五、『古事記伝』の起稿開始

宣長が『古事記伝』の稿を起したのは、『古事記伝』二二之巻の「和銅四年九月十八日」の箇所の解説の最後に、

記の本キを起し賜オトひし天武天皇の元年、申ノ年なりしに、其撰録センロクれし元明天皇の和銅元年も申ノ年なり、かくておほけなく宣長此傳アヲハを著し初ハジむる今の代の大御代の明和元年しも、又申ノ年にあたれることなむ、竊ヒソカニに奇オドロしみ思ふ、

（『本居宣長全集』巻九）

と、『古事記伝』の起稿開始を明和元年（一七六四）、申の年であると記す。そして『古事記』撰録の発端となった天武天皇の元年が申の年であり、『古事記』が奏上された元明天皇の和銅元年も申の年という、偶然が重なっている。宣長はこの申の年が重なるという偶然を「竊に奇し」んでいると記す。ここに記してはいないが、竊かにその偶然を奇しむのならば、宣長の上京した宝暦二年も申の年であった。それも『古事記』撰録の発端となった天武天皇の元年が「壬申」の年であり、宣長が古学に志す発端となった、堀景山への入門、契沖の研究方法に接したものの「壬申」の年であった。「奇しきこと」を神のなせる業と考えていた宣長にとっては、『古事記伝』の起稿を是が非でも申の年に合せようと急いだのかも知れない。

この年の正月には真淵に入門の誓紙を呈し、「神代紀」の講義を始めている。前年の十二月二十八日に真淵への入門が許可されたのを知り、喜びに満ちあふれて誓紙を呈出したのが申の年の正月である。宣長は神の導きを奇しんだのかもしれない。であるからこそ決意も新たに「神代紀」を開講し、「古事記伝」に着手したのであろう。この「神代紀」の開講は八の日を定日として、以後三回に亘ってくり返される。またこの年、宣長は所有の寛永版本を渡会延佳の『龍頭古事記』を使って、校合しているのである。晩年の寛政十年六月十七日付の荒木田久老に送った書簡に「明和四年書はじめ、卅二年にして終申候」とあるのをもって、『古事記伝』の本当の起稿は明和四年である^{註十}というのはどうかと思われる。何の準備期間もなく、いきなり書き始めることはいくら宣長といえども無理であろう。淨書をするにも、何段階もの下書、試行錯誤の期間を経て完成原稿は成るものではないか。『古事記』研究に決意も新たに取り組んだのが明和元年だとすれば、『古事記伝』の下書に着手したのもこの年と考えてよいのではないだろうか。

明和元年に開講した「神代紀」は、約一年かけて、十一月十八日に終了している。明和二年の時は何ヶ月かけたか明確ではないが、明和三年に開講したものは三月十日に終わっている。第一回目の講義には相当な時間を費しているのがわかる。多くの試行錯誤があったのであろう。『万葉集』の講義には、先学の契沖の『代匠記』や、真淵の『冠辞考』という、宣長が師と仰ぐ人々の著書があった。しかしながら『古事記』には全く、宣長が参考とする様なものは無かった。『古事記』の研究は宣長自身が道を拓いてゆかねばならなかったのである。『日本書紀』にしたところで、谷川土清の『日本書紀通證』が刊行され、宣長も宝暦五年（一七五五）に読み、その中の倭語通音図に強く興味を引くものがあったようだが、所詮宣長の満足ゆくものではなかった。それは垂加流の唐心をもって書かれていたので、宣長の満足するものではなかった。宣長にとって谷川土清は、垂加流の唐心を基盤とした、古いタイプの、宣長自身にとっては否定すべき立場の学者であった。宣長にとって『古事記』の研究は、全く白紙の状態から始めねばならなかったのである。その

為にもまずは古言の解明が必要であると宣長は考えたのであろう。それは次の、

語意を可遣所に書寫埒明かね候へば近日あとより可遣候古言梯のみ遣候

(『縣居書簡集』
賀茂真淵全集)

と、明和元年九月十三日付けの、宣長宛の真淵の書簡で明らかである。古言の研究の為、真淵の『語意考』と『古言梯』の被見を宣長は師に対して求めたのであろう。その返事である。

また明和二年には、妻の実父で谷川士清と交流のあった草深玄弘を介して、谷川士清に書簡を送り、士清の『日本書紀通證』・『和訓栞』の研究態度を、垂加流で儒学に影響を受けていると難じ、陰陽五行説を空理であると説くのである。士清の意見を聴することにより、古学の弱点を補おうと考えて、あえて難じた書簡を送り、士清の反応を見たのかも知れない。あるいは『古事記』序文の冒頭、「乾坤初分、參神作造化之首」、陰陽斯開、「二靈爲群品之祖」。あたりを意識し、儒者の意見を聴いたとも考えられる。またそこで、

厥後益求古言稍稍瘳と源窺讀古事記日本紀日夜不懈。久而熟之通曉古言則古典之旨亦明矣(中略) 嚮見下日

本紀考證中解古言者則亦皆自理學文字上說來者而大非吾古言之意也。

(『本居昌政博士全集』
第一編「書簡集」)

と、士清に八月に書簡を書き送っているのを見れば、日夜、記・紀を読み、古言に通曉しようと努力している宣長の姿が、ありありと浮かんでくる。『古事記』の訓みを考えるにあたり、この年には宣長は真淵に対して『万葉集』についての質問をしたり、真淵が書き入れをした『古事記』の借覧を願っている。これに対して真淵は、

古事記之事秘借といふにはあらねど小子本は自先年騒忙中にさまく書或は抹滅多候て他見には辨がたく候まゝ
春中得少閑候而其粉亂を白粉もてぬり明め候て後可遣候先万葉を御出情可被成候。

(『明和二年十二月十七日』
書簡「本居宣長稿本全集」)

と、明和二年の師走に、『古事記』の借覧を断り、『万葉集』の研究に精を出すようにと宣長にいつてきているのである。真淵も『古事記』の訓みには苦勞していたのであろう。宣長の求めに応じて借覧に可の返事をしたためたのが、明和四

年十一月十八日である。ほぼ二年を要したのである。

一古事記之事致承知候併拙本は先年より種々書ちらしいまだ非をも抹去をも不致候へば遣候而却而御不審多く可有候間門人之本をかり候て可遣候也其中に訓之方を専らとして傍に所々字を付たるも有之候仍其本を先かり候て可遣とも存候此訓の數度會讀いたし候事也先本文をよく訓候て後意は考有べき事なれば也世上之神代釋は皆本文は傍にて自己工夫をその所へ強て加ふる故に不通事のみ多き也右本之近日出し進可申候左様御心得可成候(辰原書簡集「賀」)
と、真淵は初めて『古事記』の訓読の一端を宣長に示してくるのである。ただしそれは門弟の講義ノートとでもいうもので、真淵の所有していた『古事記』そのものではない。またこの手紙の中で、真淵な門下生の藤原宇万伎を紹介し、宇万伎が「古学」でもって『古事記』の神代卷の研究をしているから、書簡を送り彼の説を聞いてみてはとアドバイスしている。

宣長が真淵所有の『古事記』を借り出すことができたのは、明和五年三月のことである。

古事記私本可入御覽御諸候處去春以來遠國門人來候而日夜に會談候故延々秋來終候を初冬之頃書笈中あされど見えざ此書は惣て他へ不出候を左右不見候へば延引に候依之最前會讀以後福島長民といふ人其訓をのみ記置候をかり候て此度遣候文字無之ては所々不審も可有之候へども此人大かたは心得候て假字にしろし侍れば本書とよくよみ合せられなば却て本字なきもよき事も可有之候まま先遣候此長民中卷の會の時は京に上候て不記末之卷は記したり中卷下卷は私本有之候まま向來此初卷御返の上にて可遣候私本は初學の時より訓義等書入候へば誤事も多くそれながら御見せ候ては惑可有之事故閑ごとに改め置候て可遣候万一紛失之事惜候而申とやおぼさん然らば中卷以下有とふべからず上卷のみを秘すべきよしなければ其意御承知あれかし

(辰原書簡集「賀」)
戊辰淵全集

ここに至ってやっと真淵所有の、訓みや頭注等を書き入れた『古事記』を借り受けることができたのである(同書簡に

「古事記此本頭に少々注有之候」と記す。

余程うれしかったのであろう。宣長は『玉勝間』「おのれあがたるの大人の教えをうけしやう」の中で詳しく

さて古事記の注釋を物せんの心ざし深き事を申せしによりて、その上ッ卷ををば、考へ給へる古言をもて、假字がきにし給へるをも、かし給ひ、又中ッ卷下ッ卷は、かたはらの訓を改め、所々書入れなども、てづから給へる本をも、かし給へりき、古事記傳に、師の説とて引たるは、多く其本にある事ども也、

と記しているのである。宣長は真淵自筆の書き入れのある『古事記』の訓、および注を見ることができたのは、明和五年を待たねばならなかったのである。

宣長は真淵より『古事記』注釈の爲の基礎作業として、『万葉集』、『祝詞』、『宣命』等をよく読んで、古言にまず通暁するようにと教え諭されるのである。そしてこの間、真淵は自分の著作である『語意考』や『古言梯』・『祝詞考』を宣長の求めに応じて貸し出しているのである。

宣長が明和元年に決意も新たに『古事記伝』を起稿したが、それはたぶん暗中摸索、手探りの状態ではなかったかと思われる。『古事記』の表記は全て漢字が使われているが、その使い方が非常に複雑であるといえる。即ち、純粋な漢文体の部分があるかと思えば、一字一音表記の部分もある。それが無秩序な状態で並んでいるといつてよいのである。「天」を「アメ」と訓むのか「アマ」と訓むのか。あるいは「テン」なのか「テ」なのか。どの箇所「天」は「アマ」とよび、又どの部分は「アメ」と呼ぶのか。解答に窮する部分が非常に多かったらうと思われる。

さて古の道は、二典の神代上代の事跡のうへに備はりたれば、古言古歌をよく得て、これを見るときは、其道の意、おのづから明らかなり、(中略)古事記は、古傳説のまゝに記されてはあれども、なほ漢文なれば、正しく古言を、しるべきことは、萬葉には及ばず、

〔宇比山譜〕(ラ)〔本〕
〔馬長全集巻一〕

と記すのは、まさに宣長の本心から出た述懐である（傍点筆者）。『古事記』の中の漢字の一字ごとの訓みを決定してゆくのは、筆舌に尽くし難い苦勞があったのではないか。

第二節で述べたように、『古事記』は『日本書紀』や『万葉集』と異なり、研究の蓄積がほとんど皆無といってよい状態であった。宣長にとっては、試行錯誤を加えて一つ一つ訓み下してみたものの、その訓み方が正しいのか否か、誰れも答えてくれないのである。『古事記』の訓みを決めてゆくには、宣長の訓みを写してくれる鏡とでも言うべきものが必要だったのである。それがまさに、真淵の『古事記』の訓みであったのではないか。

六、『古事記伝』巻一～四の完成

明和元年（一七六四）壬申の年に決意も新たに『古事記』の注釈を志し、三年五ヶ月の歳月が流れた。最初の浄書本として明和四年（一七六七）五月に完成したのが、『古事記伝』の巻三、それは『古事記』の本文の冒頭部分であった。引き続き巻四が約一ヶ月半後の、六月下旬に浄書を終えている。^{註上}この間の努力と心苦を物語るのであろうか。明和四年十一月十八日付けの真淵の書簡がある。そこには、

其後之御示に口候へば御眼病之由其も御全復との御事珍重仕候

（『縣居書簡続編』
賀茂真淵全集）

と、宣長の眼病が全復したことが記されている。このことは宣長が如何に『古事記伝』の研究に精力を注いでいたかを、如実に物語るものである。そして次の巻が脱稿するのは、四年後の明和八年（一七七二）十月の巻一、総論に当る部分である。これ以降、宣長は『古事記』上巻に該当する部分、『古事記伝』巻十七までを浄書し終るのに六年間をかけるのである。巻十七の浄書が終わるのが安永七年（一七七八）閏七月のことである。年平均二冊強のペースである。

明和元年に起稿して、最初の浄書原稿が完成するのに三年半。真淵の『古事記』の訓の書き入れ本を入手したりして、

次の原稿が浄書されるのに約四年強の時間を割いている。『古事記伝』巻一の、総論にあたる部分が浄書されるまでに約八年近い年月が費やされている。大変に厳しい道程であったことを思わせる。『古事記伝』の出版準備は天明五年（一七八五）頃から始められ、最初の板下のできあがるのが、天明七年（一七八七）四月の『古事記伝』巻十八で、それ以降続々と板下が完成し、校合をくり返して、寛政二年（一七九〇）九月に『古事記伝』巻一〜五までの最初の売本ができ上るのである。

明和四年に一応、『古事記伝』の巻三・四の二冊の浄書を終えているが、宣長はこれで巻三・四の部分の研究を止めているのではない。一応浄書はしてみたものの、この後何度も推稿をくり返し、加筆訂正し、書き直している。このことは谷川士清にあてた手紙によって判明する。それには、

古事記をとける物、一まき見給へるよし、一日の御物語にうけ給はりき。これは、いまだよくもとのへず、たゞ一わたり考へこゝろみて、思ひうるまゝにまづかきつけおきしを、よそならぬ一人二人に、ひそかに見せつるを、いかにして見給ひつるかに、いとくいぶかしくなん。

（「本居宣長翁書簡集」明和八年以前の八月十二日）

と、そして同じ書簡に「かの注釋は猶いく度もくかへさひ定めて後こそ、人にも見せ奉るべけれ。まだしき程にはいかでものし侍らん。さきに、かたはし見給ひしだに、心ならず思い侍るを」と記し、まだまだ書き直しが必要だと言っている。宣長は『古事記伝』の四巻までは、それは何度も手を入れ書き直しているようだ。このことは、安永三年（一七七四）一月十八日付けの谷川士清からの手紙にも「古事記傳四卷御終業候はゞ拜借仕度候」と言ってきているのを見ても明らかである。

宣長は『古事記伝』の巻五以降は、浄書が完成すると気軽に士清に見せ、彼の批判を返すが、巻四までは非常にガードが固いのである。明和八年（一七七二）十一月二日の士清宛の手紙には

こは五の巻、ちかきほどにかきをへり侍りて君に見せ奉らん。そを、やがてかしこへも見せてんと思ひ侍る。四の巻迄は、此程はなちがたき事侍る故にかくなん。

(「本居宣長」
翁書簡集)

と、また安永二年(一七七三)十一月七日の土清から宣長へ宛てた書簡には、

古事記傳七御成業に就爲御見被下、扱々精確之高論共と奉存候。可賀一辭之陋説も無御座候へ共一二以切紙得御意候。御笑置可被下候。

(「本居宣長稿本」
全集第二輯)

卷七あたりは浄書が終ると早々に、土清に見せ、その意見を聴している。宣長は『古事記伝』の卷五以降については、かなりの自信があったものと思える。

宣長が自分の手元に置いて、土清にも見せなかった卷一は、まさに本居宣長の『古事記』論であり、『古事記』研究の精神的基盤、宣長の言挙の部分である。この『直毘靈』の部分は、まさに宣長の「天照大御神の道」、古道論なのである。卷二は『古事記』の序文と系図、卷三は『古事記』本文の冒頭、「天地初発」の段以降、卷四は「伊邪那岐命の禊」の段までである。

宣長にとっては卷四までは、『古事記』の単なる注釈ではなかったのではないか。彼の畢生の仕事の総仕上げの部分に当り、浄書してみたものの満足のいく部分ではなかった。まだ充分に宣長の中でも煮つまっていなかったのではないか。試作品の状態では土清に見せるのはためらわれたのであろう。卷四までは本当に何度も何度も手をいれている。

卷三・四という明和四年(一七六七)六月までに一応浄書した部分は、寛政二年(一七九〇)九月に出版されたものとは大いに違うものであったらうと思われる。先述した様に、宣長が真淵の書き入れ本を手にしたのが明和五年三月である(明和四年十一月には真淵の講義を記した門弟のものを借り出すことができた)。宣長はこの卷三と四の部分に、「さて又師説には」とか「師の説にては」、「師は此を用ひてナシ、テと訓れき」、「師は宇倍那理とよまれき」等と、真

淵の説あるいは訓読法を多数引用している。とすれば、浄書後に少なくとも一回、多ければ二回書き込みをしていることがわかる。また巻四には「真福寺の本には以爲とあり」と、真福寺との校合のあとが記されている。宣長が『真福寺本古事記』を見たのは、天明七年（一七八七）四月頃である。これは真福寺に伝来したそのものではなく、天明六年に尾張藩主によって『真福寺古事記』の書写を命ぜられた人物が、密かに別に一本写しておいたものであるという。巻四の板下ができたのが天明七年の七月である。巻三の板下が六月に完成しているので、まさに板下作成直前に『真福寺本古事記』との校合を行っているのである。さらに、巻三に「此稱の事は、伝十三の八の葉に云うべし」、また巻四には「伝十の六十七葉」等と記された部分がある。この事は、『古事記伝』の巻十三、あるいは巻十の板下が完成していたことを示しているのではないだろうか。

『古事記伝』の巻三の板下を名古屋の本屋へ送ったのが、天明七年（一七八七）十二月、巻十三の板下の完成が寛政元年（一七八九）。巻四の板下を本屋に送ったのが寛政元年四月、巻十の板下の完成が同年五月である。とすれば、巻三や四の板下を記す時に、すでに巻十三や十の板下の下書が完成していたから、指示ができたのであろう。あるいはまた、名古屋の書肆に板下を渡した後、巻十三や十の板下が完成したので、わざわざ書き加えたのかもしれない。後者であれば大変な執念である。

『古事記伝』の巻五以下も『真福寺本古事記』との校合を加えているし、校正刷りの時に手をいれたのではないかと考えられる部分がある。即ちそれは、巻五以下にしばしば「おひつぎの考」というものが入っている。これは校正刷りの後の加筆ではなかったのか。板下作成中の時点とすれば、何も「おひつぎの考」とはしなかったのではないか。

次に巻一・二の成立について見てみたい。巻一の浄書が完成したのは明和八年（一七七二）十月九日である。大久保正氏は『本居宣長全集』（寛政）巻十四の解題の中で、『古事記伝』の巻一・二にあたる『古事記雑考』、『道云事之論』、

『直霊』について述べる。『古事記雑考』は、その中の文体（仮名遣い）の不統一により、明和四年（一七六七）以前に既に脱稿していた。刊本の『古事記伝』巻一所収の『直毘霊』の成稿は明和八年十月九日と記されているが、これは『直霊』の成稿した日、即ち明和八年十月九日を襲ったものである。刊本の『直毘霊』は、この『直霊』に更に推敲を加えたものである。宣長が安永三年（一七七四）十月十六日から十一月三十日にかけて門弟を集めて講義したものは『直霊』であったという。

「ナホビノミタマ」即ち、『直霊』と『直毘霊』は、項目の順序が異なる箇所もあり、改訂された部分もある。宣長が自宅で『直霊』を講義したことは、安永二年（一七七三）十一月の谷川士清の求めに応じた風もないのと一見矛盾するようにも見える。だがそうではない。『古事記伝』巻一の「ナホビノミタマ」は本居宣長の古道論を示したもので、宣長の古学研究が到達した窮極の書であり、まさに本居宣長そのものと称してよいものである。であるからこそ「直毘霊論争」がおきるのである。但來学派の市川匡鷹が宣長の弟子から借りた「ナホビノミタマ」の道の論を、独善的で狂信的だと『末賀能比連』を記し、安永九年（一七八〇）九月に宣長に伝えた。それを讀んだ宣長はわずか二ヶ月後の、同年十一月二十二日に反論の書『くず花』を記すのである。

宣長がこのように素早い反論を行なうのは、「ナホビノミタマ」がまさに『古事記伝』執筆の動機、根幹にかかわるものであったからである。それはまさに宣長の古学・古道論の根幹にかかわるものであった。

宣長は士清の求めに応じて、『古事記伝』の巻五以降のように、気軽に巻四以前を士清に貸し出すことができなかつたのである。何度も推敲をくり返し、手直しをし、十分に納得がゆくものでなければ、いくら宣長と士清の仲が気のおけない間柄であったとしても、貸し出すことはできなかったであろう。まして士清は儒学になじんだ、古いタイプの垂加神道の学者である。客観的な文献を駆使し帰納的に論じることのできる『古事記』本文の部分と、主観的な自己の信

念思想信条を述べた古道論「ナホビノミタマ」を含む部分の違いは明らかである。宣長にすれば、客観的な部分においては土清の批判に対して充分に答える自信があったし、土清の賛同も得られる自信もあったであろう。だが主観的な古道論になれば、土清の賛意を得るのは難しいことは明確に自覚していたのではないか。

安永三年に板木にして二十七枚強の僅かな部分を、門弟の前にして十三回にわけて講義したのは、『古事記伝』の開板をひかえ、その必要性を強く感じたからである。「ナホビノミタマ」はまさに、宣長の到達した古学に対する論、古道論である。それを聞いた門弟の反応を観察すれば、「ナホビノミタマ」の弱点や疑問点、あるいはよりよい論じ方が見えてくる。『古事記伝』が出版されれば、当然古学者以外の、儒者や仏教者の側の人々、学に志す人々等、多くの人々の目に触れる。反論も当然予想される。また学に志す人々の啓蒙書でもなければならぬ。古道論を多くの人々に理解されなければ『古事記伝』出版の意義は半減するのである。

であるからこそ、門弟の前で講義をし、よりよいものを期し、その後推敲を重ね、手を加えたのであろう。宣長の古学に対する執念がみえるのである。また安永三年というのは『古事記伝』の浄書が軌道に乗った年なのである。本居宣長は心身共に充実していたのである。

註一 卷二の90番歌に『古事記』の輕太子と衣通王の段で歌われた「後亦不堪戀慕而、追往時、歌曰、

岐美賀由岐 氣那賀久那理奴 夜麻多豆能 牟加悶袁由加牟 麻都爾波麻多士 此云山多豆考 是今造木者也。」という歌を採択し、詞書と

左注に『古事記』と記されている。90番歌には次のように

古事記曰、輕太子姪輕太郎女。故、其太子流於伊豫湯也。此時、衣通王、不堪戀慕而追往時歌曰

君之行 氣長久成奴 山多豆乃、迎平將往 待余者不待 此云山多豆考 是今造木者也

右一首歌、古事記と類聚歌林所説不同。歌主亦異焉。因檢日本紀曰……

と「古事記」、「類聚歌林」、「日本書紀」の書名がと記されている。また卷十三の326番歌（木梨輕太子の歌）も「古事記」の歌を記し、その左注に「檢古事記曰、件歌者、木梨輕太子自死之時所作者也。」と、「古事記」という文字が記されている。

註二 「日本紀私記」といわれ、(一)養老五年(七二二)私記、(二)弘仁四年(八一三)私記、(三)承和六年(八三九)私記、(四)元慶二年(八七八) (延喜四年(九〇四)私記、(五)承平六年(九三六)私記、(六)康保二年(九六五)私記の七種の「私記」がわかっている。

註三 「日本古典文学大辞典」(岩波書店)、「神道辞典」(堀書店)、清原貞雄著「國學發達史」(昭和二年・大鏡閣)等参照。

註四 久松潜一「古事記研究史序説」(古事記大成)(昭和三十一年、平凡社)

註五 「校本古事記」(昭和四十年、統群書類従完成会)「解説篇」、「日本古典文学大辞典」等参照。

註六 石井庄司「古事記伝に投影せる契沖の国学」(古事記伝の研究)皇国文学二輯)

註七 芳賀登「本居宣長—近世国学の成立—」(昭和四十七年・清水書院)の中で、宣長は今井田の養父にしがって度々参宮したり、その垂加神道の影響を強く受けたとする。

註八 「本居宣長稿本全集」第一輯、本居清造氏調査による。

註九 「寶曆二年以後購求謄寫書籍 附目錄」による。

註十 倉野憲司「古事記伝」(岩波文庫・解題)

註十一 「賀茂真淵全集」(縣居書簡集讀編)によれば、明和五年とする。

註十二 大野晋「本居宣長全集」第九卷(昭和四十三年、筑摩書房)「解題」に詳細な調査表が作られている。